



## 目 次

過渡期の図書館ロマンチスト(前野みち子) ...	1
21世紀へのたびだち	
ゲーテンベルクはbit間を読むことができるか (蒲生英博).....	4
電子出版と図書館の未来(伊藤哲谷).....	5
法学部図書室の利用システム変更作業を 振り返って(高橋知恵子).....	6
WWWOPACのQ&A.....	7

## 過渡期の図書館ロマンチスト

前 野 みち子

本らしい本など全くない家に育った。幼い頃、駄菓子屋で引いた籤がたまたま当って、漫画の『ジャックと豆の木』を手に入れた。それが読みたいと親にねだって、字を覚えた。そんなきっかけも手伝ってか、小学校の頃は漫画をよく読んだが、それと並行して絵のない本にも興味が湧いた。お姫さまと王子さまが出てくる童話が好きで、図書室にあった様々な国の童話集を読みふけた。

中学生の時は赤毛のアンと推理小説とSF、高校生の際は受験勉強のストレスのせいか、退行して再び児童文学と漫画に熱中した。大学生になったら児童文学を専攻して、将来はその翻訳者になりたいと思った。大学に入って一年もたたないうちに病気で二年休学、その後は少し大人っぽい悲愴な気分になって現代小説などを読み始めたが、読書家とは到底言えなかった。夏休み前に図書館で借りた二冊の長編小説を、バイトと遊びに明け暮れた休みが終りに近づいた頃、学生としての良心の疚しさからあたふたと読み終えたりもした。そんなありふれた女子大生を何年かやって、そろそろ学生生活最後の年が近づいてきたとき、ふと、卒論くらいまともなものを書いてみようと思った。新宿の紀伊国屋の洋書コーナーへ出かけて、たまたまそこに並んでいたドイツのある現代作家の作

品と評論を三冊まとめて買った。単位のために漫然と受講していた授業の教科書を除けば、これが初めての洋書購入だった。それまで取りたてて明確な目的意識も持たずに過ごしてきた長い大学生活が、打って変って緊張に満ちた楽しいものになった。頭の芯が妙に冴えて、対象についてあれこれ考え始めると止まらない満ち足りた時間の体験が始まったのは、この頃からである。つい最近、大学時代の友人から何十年ぶりかで電話をもらった。大学時代は一緒にミーハーやってたのに、何で今はそんなことしてるの?という彼女の感想は、正直言って自分自身の感想でもある。それに、現在はもうミーハーでなくなった、というわけでも実はない。

大学時代のほとんどを図書館とはまるで縁遠い空間で過ごした人間が、名古屋大学図書館とその将来について、恋するロマンチストのように思い入れたっぷりに語るというのは、いかにも場違いに思える。しかし、どういう原因によってかは未だに不明だが、高校生の頃から、図書館や書店など、本が沢山並んでいる場所に足を踏み入れると、いつも奇妙に興奮してお腹が痛くなった。まともに本を読んでいないという自覚からのプレッシャーだったのか、それとも本という存在に対するいわば宗教的な(?)畏

敬の念だったのか、いずれにせよそれは、本のもつ魔術的な可能性、本がわたし達に垣間見させてくれる世界の未曾有の可能性についての、ある種生理的な予感だったのだと思う。

そのようなナイーブな反応はさすがにもう忘れかけているが、特に当てもなく、関心のあるいくつかの分野の本がぎっしりと詰まった書架の間を歩いていると、今でも何か心が躍り幸せな気分になる。時間が経つのを忘れる。一冊の本がふと目に止まると、次から次へとその周辺の本が気になり始める。ああこんな本もある、これも読んでみたい、これも面白そう 手にとって目次を見る。ぱらぱらとページをめくる。拾い読みしているうちにいつのまにか引き込まれて、閉館のアナウンスにはっと我に返ることもある。本を読んで考えることを仕事にするようになってからは、とかく目先の対象に時間を奪われがちで、ブラウジングはかなり贅沢な楽しみになってしまっているが、それでもやはり、狭いところに落ち込んで自分の位置を見失わないためにも、時折りは是非とも享受すべき楽しみだと思っている。

こういう楽しみ方は、今では時代遅れになりつつあるのかもしれない。名古屋大学の附属図書館は開架式で、本はすべて分類番号に従って手の届くところに並べられているから、パソコンで検索した後は、欲しい本を目指してまっしぐら、わき目もふらず一目散に駆けつけることができる。想い焦れる本はただ一冊、という純粹さは、確かに一つの美德ではある。図書館ロマンチストとしても、その一途な気持ちが分らないわけではない。しかし、せっかくの開架式なのだから、その本の置かれた環境に少し注意を払ってみてもいいだろう。そうすれば、その環境が作り出す意味空間を体験することができるし、その環境の中での目指した本の位置を知ることができる。それはつまり、その本そのものの意味でもある。書架をめぐり、探し当て、抜き出す前に、その書架の前にしばし佇んで、隣り合って並んでいる本の背表紙をせめて一棚くらい、せめて一書架くらい左右上下に眺めてみることは、決して無駄なことではない。たまたま両隣りに居合せた本との仲をあれこれ憶測



してみたり、あるいは、一つの類にまとめて並べられた本の一族の思想的葛藤や愛憎に思いを馳せてみたりすることは、結局目指した本のより深い理解につながっている。

だからと言って、電子化が進行しつつある名古屋大学図書館において、更なる電子化を推進する委員会の副委員長という任務を負う者として、また自身電子化の恩恵に深く与っている者として、ブラウジングの楽しみばかりが図書館の最も推奨すべき機能だ、と思っているわけでは毛頭ない。いや、むしろこう言ったほうが正しいだろう。ブラウジングはその意味を重層化しつつ、現代の、そして将来の図書館にとって益々重要な意味をもつに至っている。パソコンを通してアクセスするヴァーチャルな図書館でのブラウジングもまた、かつてこの言葉が意味したものと共に、わたし達の図書館のリアルな現実を作っているのである。これら二つのスタイルのブラウジングは、相互補完的に一体となって初めて、21世紀にふさわしい《わたし達の図書館》の構築に寄与することができる。

実際、名古屋大学附属図書館のホームページから利用することのできる文献検索用データベースは、ほとんどコンピュータ・イリテリットに近い筆者にとっても、今や欠くことのできないものになっている。そして、いつのまにか身につけた自分なりの利用法は、やはりブラウジングの楽しみを捨ててはいないどころか、この楽しみを満喫することにしばしば重きを置いているのに気づく。それは思いつくままのキーワード検索でもいいが、自分の頭の中にはまだ存

在しない概念の結合が思わぬ視点を提供してくれる場合も多いから、例えばこんなやり方で、関心テーマの周辺を探る。著者とタイトルの分っている本の所蔵を検索するついでに、わざわざその詳細画面の 件名 に示されたいいくつかの語を拾って、もう一度キーワード検索する。あるいは著者名だけもう一度入力して検索する。そして、自分にとっては目新しい周辺領域の古今の研究成果を概観したり、その著者についての概略的な知識を得たりするだけでなく、その中から予期せぬ格好の文献を探し当てたりもする。めざす本がある叢書の一冊だということが分れば、リンクするその叢書全体の画面を出して、めぼしい著作をピックアップする。個々の本の詳細画面は、もちろんリアルな本の目次を眺めたりページをくったりするほど、多くの情報を与えてくれるわけではない。それでも、恐ろしい速度で、恐ろしく多様な関連の網の目とその更なる展開可能性を示してくれるこの道草的利用法は、やはりブラウジングと呼ぶにふさわしい。そう、自分の追い求める理想の名古屋大学図書館もまた、こんな風にして現実の書架の並ぶ限られた空間を押し広げ、その不足を大きく補うことのできるヴァーチャルな図書館と、既に分ちがたく一体となってイメージされているのだなと実感する。

もちろんこのような利用法は、少し古い時代を対象として比較文化史的なアプローチを試みる者の無手勝流で、ほとんど誰の参考にもならないだろう。とりわけ、最新の雑誌論文に常に目を光らせ、一刻を争ってその先を行こうと努力しなければならない数多くの分野の研究者から見れば、暇人のたわごとと思われるに違いない。しかし、ブラウジングはリラックスのため的一种のスポーツとして、専門化の陥りやすい膠着の罟から軽々と抜け出す術を教えてくれることがある。そして、それぞれがそれぞれの立場と必要から、自分にふさわしいブラウジングの方法を見つけ出すことができるのも、どれほど広大なスペースを誇る図書館であれ、固定した書架の並ぶリアルな図書館には期待すること

のできない、電子図書館の限りなく大きなメリットなのである。電子化の進行は、現在はまだ予想もできないような可能性を含んで、わたしたちの図書館像を日々確実に変容させつつある。

ところで、電子化が進行すれば紙の本はなくなる、という説がある。分野によっては確かにそういうことも考えられるかもしれない。しかし、人間が三次元空間を占める物理的存在である以上、手触りと重さをもった物としての本なしに、あるいは少なくともそれを具体的にイメージすることなしに、情報をあたかも無味乾燥な宇宙食のように食べ続けることで満足しきれるとは、到底考えにくい。それとも、あるいはこれも、やはり過渡期の世代の実感に過ぎないのだろうか？ 物の感触を知り、物との交流によって自身の生活空間を築いてきた世代が、物に対して感じざるをえない一種のノスタルジーなのだろうか？ これまで出版されてきた、現在も出版され続けている本は、近い将来、ストーンヘンジのように、謎めいた過去の遺物、無用の長物に成り果てるのだろうか？ 本を愛する者には、確かにどこかしらフェティシストめいたものが付き纏う。情報とは本来そのようなフェティシズムとは無縁の、個別の顔を持たない、だからこそ万人に開かれたものなのだと言うこともできよう。それでもやはり、人間が物理的で個別的存在であることを止められないように、止めてはならないように、そして遺伝子解析がいくら進んでも、人間存在のすべてを電子情報に還元することはできないように、優れた本が体現する一種の人格もまた、その物理的存在形態を欠くべからざる条件として要求しているのではないか？ ヴァーチャル空間の意味を実質的なものにする支持体として、物理的な空間の個々の手応えは失われてはならないのではないか？ 過渡期の図書館ロマンチストは、そう考えたいのである。

少なくともそのような認識に立って、名古屋大学図書館の将来構想は、従来の保存機能と電

子図書館機能を統合する新しい図書館像を打ち出している。それは既に進行しつつある事実を踏まえた必然的な将来像でもある。ところが、言うは易く行うは難しの諺どおり、この将来の理想像は、山積する現実の生々しい諸問題に取り囲まれ圧倒されて、もう今から喘ぎ始めている。進水前の難船はあり得ないが、その進水の目途さえつかず、足元がいかにも覚束ないのである。ブラウジングの楽しみに一人没頭するには、図書館を取り巻く状況は困難を極めている。理想の図書館に対する心躍る思い入れが、単なるロマンチストの夢に終ることなく、何かしら実質的な実を結ぶためには、重い腰を上げて、一人没頭する読書空間から難問の渦中に足を踏み入れなければならない。このようなジレンマは、現実を少しでも理想に近づけたいと願う人

間にとっては、恐らくあまりにも自明の、わざわざ口にするに及ばぬものだろう。必要なのはただ、同じ思いを抱く人々が一人でも多く一堂に会し、力を合せることなのだ。名古屋大学の将来の発展が、充実した図書館の実現と切り離せないこともまた、あまりにも自明の、わざわざ口にするに及ばぬことであるはずだから

。そうやってズブズブ泥沼にはまり込んで行くんだよ、という声がどこからか聞こえる。うーん、何とかして足取り軽く、二つの空間を歩き来できないものかしら。過渡期の図書館ロマンチストは、現実に立ち向かう意をまだ完全には決しかねているのかもしれない。

(まえの・みちこ 大学院国際言語文化研究科 教官)

## 21世紀へのたびだち



### 「ゲーテンベルクは bit 間を読むことができるか」

蒲 生 英 博

なんか違うんやけどなあ、こんな筈やなかったのにい、と思うことが近頃多くなった。

NICHIGAI/WEBで、[ 21世紀 ] や [ 図書館 ] という言葉をキーに雑誌の記事を探してみると、ヒットした記事には、「電子図書館」「情報専門職」「地域ネットワーク」「利用者教育」など、図書館世界の住人ならば、おなじみの言葉が溢れている。でも、それらと並んで「変革」「新たな挑戦」とあると、新たな変革に挑戦し続けることだけが大事じゃなくて、頑固に継続性にこだわることも勇気がいることかもしれな

い、と感じてしまう。あれっ、記事の中には1980年ごろから21世紀の図書館に向かって書いている人がいるね。うーん、図書館という枠組みで考えてしまうところが、20年前たるゆえかな。

デジタル革命はゲーテンベルクの印刷技術に匹敵する、と言われている。けれども、情報の圧倒的な増大や質的变化はあっても、今まで本のてっぺんにいっぱい積もっていた埃が急になくなるわけでもない。「この本が図書館にあるということに価値がある」という時代を経て

(いまだに?) デジタル情報と共存する時代となったということだろう。印刷されたものからデジタル情報が生成されることに何の異論もないが、では、無限に複製される電子情報を図書館が持たなきゃいけない意義ってなんだろう? 電子的複製は、時間、空間を越え、情報の格差をなくすまでには未だ至っていない。一方、大量の電子的複製が創造性や天才を刺激し、大量のオリジナルを拡大生産するならば、図書館を経由する意味もあるのかもしれない。しかし、本の番人から司書へ、さらに情報専門職へ、三段跳びの着地点に待っているものは、ぼくが目指してきたものとは違う世界のような気がする。単にデジタル情報の自販機になって、要求に応じてポンと情報を提供するのであれば、ブ

ラッドベリの小説に出てくるブックマンが図書館にいるようなもので、デジタル情報の「行間を読む」なんてできそうもない。

図書館が、21世紀を歩みとおすときに助けになるものは、電子××でも情報でもなくて、図書館を利用しようという意思を持つ人たちの足音だ、とベンヤミンの響に倣っていうしかないか。ふう。グールドの息遣いにも似て。(似てへんて!)

注: NICHIGAI/WEB (雑誌記事索引)

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/DBannai/DBannai.html>  
#ZASSAKU

(がもう・ひでひろ 農学部・生命農学研究科  
図書掛長)

## 電子出版と図書館の未来

伊藤 哲谷

数年前のテレビCMで、外国の老人と孫が散歩をしながら、孫「お爺ちゃん、博士論文がやっと書き上がったんだってね。」祖父「IBMが大学の図書館の本を全部電子化してしまった。それでお爺ちゃんは資料を読むことができたので論文が完成した。大した時代になった。」これはとても現実感のあるCMだった。ただ、現代本は研究対象だったのだろうか、とぼんやり考えた。

思えば人が印刷物と向き合う時代が千年続いた。印刷出版の時代は、出版者は出すだけ、個人や図書館が収集保存して利用者が読む、出版-(保存)-利用の分担が機能した時代で、それ以前は、著作-(書写)-利用という形式だった。ここに起きた爆発的進化が、千年後に電子出版-電子アーカイブで再現するかどうか、つまり本当に「大した時代」なのか、悩める問いである。

電子出版というのは今のところ二種類出現し、CD-ROMのような電子媒体での出版と、オンライン出版である。前者は印刷出版に近く、媒体の頒布により著作が伝達されるのは印刷物

と基本的には変わらない。

後者は、著作が媒体を纏わない、つまり形のないデジタルデータがネット上に搭載されることで半分、オン・デマンドで利用者に配信・利用されて出版行為が成立する。第三者による中間保存は基本的には違法で、利用者を求める限り出版は理論的にはエンドレスであり、出版者がそれを維持しなければ著作そのものが消滅する。

この出版構造からは、中間保存としての図書館は疎外される。つまり電子出版物は、無料もの以外著作権切れまで常に課金から逃れられない宿命を負い、今までの利用形態に悉く馴染まない。貸出しも複写もないし、ILLもない、古本屋など勿論ない。海賊版はあるだろうが。理由は簡単に言えば、著作が媒体を纏わないため複製が瞬時完璧であることに尽きるが、強さも実は同じところにあり、この商品を難しくする。

デジタルが、電子出版に抱え込む宿痾は重い、更に一方で電子アーカイブという可能性で語られて見立てを混乱させる。図書館が何世

紀にもわたる出版物を蓄積し、無償で利用者に提供できるのは法律で保護されているからだ。電子出版に於いてはその保護も剥奪され、著作権や著作権などのうちで博物館的なアーカイヴの集積意義だけが与えられるのか。この股裂きに似た変革の痛みをいつかは見るのか、という問いをひとは笑うだろうか。

現時点での電子ジャーナルのように、印刷物と共存していくのならば時代を画する程のこと

ではないが、幾多の間を孕みながらも、やはり電子出版は遠からず印刷物文化を置き去りにするだろう。その文化の一端を担ってきた図書館でありながら、その図書館がまた電子図書館という言葉が気軽に使う。孫「お爺ちゃん、ほら、足元の溝に気を付けて・・・」

(いとう・てつや 情報文化学部・人間情報学  
研究科図書掛長)

## 法学部図書室の利用システム変更作業を振り返って

高橋 知恵子

一部局の図書室の変動期から、目指すべき図書館の未来につなげてゆけたら幸いである。昨年8月、法学部図書室は利用システムを閉架式から開架式に変更した。それまでの閉架式は創設以来、不動のものとして、開架式を希望する職員の間では夢物語であり、学部生にとっては粘り強い要求にもかかわらず、重い開かずの扉であった。職員の多くは法学部ならではの完璧な利用規則に敬服し、部局の図書に対する位置付けの重さに納得しながら、その規則の守り手として仕事を全うしてきた。4ヶ所の書庫を走りまわる労力だけでなく、細かく決められた入庫条件の判断の難しさ、入庫できない利用者からの要求に対するもどかしさ等、近年の出納業務の煩雑さは極限状態に達していた。

書架増設のための図書室改修の話がきっかけになり、初めて職員の側からそれまでの夢物語ではなく現実の問題として、利用者サービス向上と業務合理化の点から閉架式の問題と開架式の改善案が出された。その頃、部局改革も頂点に達し、大学院重点化で様々な受入形態の膨大な数の院生・学生の対応に、創設当時の家族的で小規模な運営の全てを見直す時期を迎えていた。機が熟す形で図書室の改革がその一環として取り上げられた。図書委員会を中心に検討が重ねられ、昨今の学生のモラルの低下を警戒する慎重論にも応えられるよう、合理的で安全なシステムが追求された。

その結果、利用者にとっては利用しやすく、

職員には働きやすい配置で改修を行い、一部の書庫と学外者を除いた全ての利用者が書庫内を利用できる開架式を導入した。それに伴う変更点の全ては紙面の関係で紹介できないが、開かれたサービスとセキュリティ両面からいくつか見直しを行い、現在も進行中である。

開架式が改革の全てではないが、それを契機に限られた予算と人力で、創意を働かせて従来のやり方を見直し、いくつかの改善ができたことは大きな前進であった。職員にとっては希望してきた開架式の導入が大きなステップになったことは間違いないと思う。一年たった今、概ね順調に運用できたことに関係者一同安堵している。今後の課題も多く、従来の運用の見直しだけでなく、激動ともいえる時代の流れと図書館に求められるこれからの改革を前にして、やっと出発点にたったようなこの数年のとりくみであった。

(たかはし・ちえこ 法学部・法学研究科図書  
掛長)



## WWWOPAC の Q & A

### 雑誌の所蔵の確認

この1月から新しいWWWOPACとなり早くも1年過ぎようとしています。検索方法については画面上のヘルプ (<http://opac.nul.nagoya-u.ac.jp/help/japanese/index.html>) を参考に利用していただいています。使いやすいと概ね好評ようですが、雑誌の所蔵の確認については、カウンターでよく質問を受けます。実際には、図書館では所蔵していない雑誌だったり、該当の巻を所蔵していなかったりするケースがあります。なお、論文のタイトルからは、検索できません。

#### 1. 所蔵巻号を確認するには

雑誌の場合、該当の雑誌があるかどうかだけでなく、該当の巻号があるかどうかを確認することが必要です。検索後、書誌一覧画面で探している雑誌名をクリックすると、表示される画面が、一括所蔵一覧・書誌詳細画面です。

#### 一括所蔵一覧・書誌詳細画面(下図参照)

ここでは、一括所蔵一覧の配置場所と所蔵巻号に、まず注意!

- ・配置場所・・・雑誌を所蔵している場所
- ・所蔵巻号・・・最初の( )で所蔵している雑誌の最初の巻の年と最後の巻の年をハイフンで結びます。その後実際に所蔵している巻号が表示されます。最後に+ (プラス記号)がついている時は、その後の巻も継続して受入していることを示します。

### 所蔵一覧画面

一括所蔵一覧の各巻所蔵一覧をクリックすると、所蔵一覧画面が表示されます。

ここでは個別の巻の情報が表示されます。例えば、最新の巻、製本作業中かどうか、製本されたもの(資料IDがある)かどうか、わかります。ただし、表示されるデータは新しいものだけということにご注意ください。

#### 2. 所蔵していない雑誌も表示されます

WWWOPACでは、雑誌の継続関係(継続前誌、継続後誌)を表示し、リンクをつけることによって、継続前誌、継続後誌の書誌や所蔵のデータを連続的にみることが出来ます。たいへん便利な機能ですが、名古屋大学図書館が所蔵していない雑誌の書誌も表示してしまうという欠点があります。継続関係のある多数の雑誌のうち、一つ所蔵していれば、他の所蔵していない雑誌の書誌データも表示されます。一括所蔵一覧・書誌詳細画面にて、一括所蔵一覧がなく、書誌詳細のみの画面だった場合は、所蔵していない雑誌です。

#### 3. ダミーデータについて

一括所蔵一覧の所蔵巻号が空白で、備考に"Dummy"と表示された時は、これはまだ完成されたデータではありません。各巻所蔵一覧をクリックしていただくと、所蔵している新着の巻号がわかります。詳しくは、所蔵している図書室へお尋ねください。

情報・言語合同図書室が所蔵

1997年～1999年の間で94巻の1～5号と7～12号、95巻と96巻の全ての号、そして、継続して受入中

一括所蔵一覧(3件)

1. 配置場所: 情報・言語 所蔵巻号: (1997-1999)94(1-5,7-12),95-96+ LDF: 備考: [各巻所蔵一覧] [巻号絞り込み]

2. 配置場所: 中央館 所蔵巻号: (1927-1998)24(1),26(9,11),27(1,2,4),29(1,7,9-11),30(6,9),31(3-4),34(9),35(7),36(2),46(1-9,11-12),49-94,95(1-4)+ LDF: 備考: [各巻所蔵一覧] [巻号絞り込み]

3. 配置場所: 中央館 所蔵巻号: LDF: 備考: Dummy [各巻所蔵一覧] [巻号絞り込み]

書誌詳細 [ヘルプ: 書誌詳細]

和雑誌<ZW50000252>  
 標題および責任表示 新潮|シンチョウ  
 巻次・年月次 1巻1号 (0月37.5)-43巻6号 (大14.12); 23年1号 (大15.1)-

〔国内図書館関係日誌〕

- 12.7.7 第48回国公立大学図書館協力委員会（於：佛教大学）  
出席者：伊藤館長、田村事務部長、藤森情報管理課長
- 12.7.19 平成12年度東海地区大学図書館協議会総会・研究集会（於：愛知工業大学）  
出席者：伊藤館長、田村事務部長、藤森情報管理課長、加藤情報管理課長補佐
- 12.9.13 学術出版と電子ジャーナルに関する懇談会（於：東京大学）  
出席者：伊藤館長、小花情報システム課長
- 12.10.5 電子ジャーナル・タスクフォース（於：東京大学）  
出席者：伊藤館長、小花情報システム課長

〔学内動向〕 <12.7.6-10.5>

会議

- ・第12-2回図書館システム検討委員会<7.11>
  - ・第12-1回図書館自己評価実施委員会<7.11>
  - ・第12-1回和漢古典籍整理専門委員会<7.14>
  - ・第12-2回図書館商議員会<7.18>
    - ・キャンパスマスタープラン2001における附属図書館の位置付けについて
    - ・自己評価実施方針について
  - ・文系図書連絡会<7.18>
  - ・教職教育研究図書コーナー小委員会<7.21>
  - ・第12-4回学術情報事務会議<7.28>
  - ・理系図書室連絡会<7.31>
  - ・第12-2回電子図書館推進委員会<9.7>
  - ・第12-2回蔵書整備委員会<9.7>
  - ・第12-2回自己評価実施委員会<9.11>
  - ・第12-3回図書館商議員会<9.18>
    - ・名古屋大学附属図書館利用規程等の改正について
    - ・平成11年度附属図書館図書費決算について
    - ・平成11年度附属図書館運営費決算について
    - ・平成12年度附属図書館図書費実行予算について
    - ・平成12年度附属図書館運営費実行予算について
  - ・第12-3回図書館システム検討委員会<9.28>
  - ・第12-5回学術情報事務会議<9.29>
- 研修・講習会等への参加
- ・平成12年度専門図書館協議会全国研究集会（於：名古屋国際会議場）<7.13～14>参加者：岡美江（国際開発研究科情報資料室）
  - ・全文・電子ジャーナル説明会（於：名古屋大学）<7.17>参加者：46名
  - ・図書館職員教育プログラム初級研修（於：名古屋大学）<7.19、7.25>参加者：67名
  - ・東海地区医学図書館協議会実務担当者会議(12-1)（於：愛知医科大学）<7.31>参加者：小倉文子、渡邊通江、大嶋寛子（以上医学部分館）
  - ・平成12年度総合目録データベース実務研修目録担当者コース（於：国立情報学研究所）<9.18～29>参加者：米津友子（情報システム課）
  - ・NACSIS-IR地域利用説明会（於：名古屋大学）<10.5>参加者：原系子、中村喜久代、愛場美和子（以上情報サービス課）渡邊通江、大嶋寛子（以上医学部分館）澤口由好（法学部図書掛）
- 部局動向
- ・理学部化学図書室・多元数理科学研究科図書室 - 建物改修工事に伴い、休室ならびに相互協力業務休止<12.10.2～13.3.30>
  - ・農学部図書室利用細則一部改正<10.1>
- 編集委員会
- 玉木 茂（委員長）島岡 眞（中）小林恵子（中）岡本正貴（中）澤口由好（法）藪本佳壽子（育）戸床トシ子（理）斉木敏郎（工）